

『1850年のマルクスによる経済学研究の再出発』（
八朔社，2018年）を出版して

著者	橋本 直樹
雑誌名	経済学論集
巻	93
ページ	21-31
発行年	2019-10-29
別言語のタイトル	Zur "Wiederaufnahme der ökonomischen Studien von Marx in 1850", Tokio (Hassakusha) 2018
URL	http://hdl.handle.net/10232/00030832

【研究ノート】

『1850年のマルクスによる経済学研究の再出発』

(八朔社, 2018年) を出版して¹

橋 本 直 樹

(報告概要)

拙報告「『1850年のマルクスによる経済学研究の再出発』(八朔社, 2018年) を出版して」では、拙著について、下記の問題意識や特徴、内容をとりまとめ紹介した。

拙著の直接の問題意識は表題の通りである。1850年にマルクスはロンドン亡命が確定し、そこでの資本の運動の実態を観察し、大英博物館の膨大な蔵書を利用して、経済学の研究を再出発させる。しかしながら、この時点での彼の経済学の体系と内容はこれまで不明であった。これを確定し、後の『資本論』に至る直接の出発点を明瞭にしたことが拙著の成果である。

拙著は、新『マルクス/エンゲルス全集』(新MEGA) が刊行されてすでに40数年になるが、『資本論』手稿以外の新MEGA 諸巻を利用して一人で一書としてまとめ上げた国内で最初の、したがって唯一の研究書だという特徴をももつ。

そのため、新MEGAの編集体制の不備を補う研究書となっている。新MEGAは4つの部門で編集されているが、部門間の連携は必ずしも十分でなく、マルクスの抜粋類がその著作等にどのように利用されているかといった情報が学術附属資料部(Apparat)に記載されることは稀であった。拙書はこの欠を1850年について補った。『新ライン新聞。政治経済評論』第5・6合冊号所収の「評論。5-10月」は、マルクス/エンゲルスが当時の全般的好況を確認し、1848年革命の終結を表明したことで著名である。拙著第6章では、この「評論」の前半3分の1で1847年の恐慌史を描いた部分が、ほとんどエヴァンズ著『商業恐慌。1847~1848年』並びにマルクスの「ロンドン・ノート」第1冊における本書からの「抜粋」を利用してのものであること、第7章では、同「評論」の中間3分の1で1848年革命後のヨーロッパの繁栄を論じた部分の多くがマルクスの「ロンドン・ノート」

¹ 本稿は、2019年6月15日(土曜日)14時~17時30分、九州産業大学1号館9階、中会議室で開催された2019年度経済理論学会西南部会での拙第3報告(16時30分~17時30分)に若干の補訂を加え、「研究ノート」の体裁をとって掲載するものです。本稿中、「報告者」や「報告」等の語があり、またデスマス体であるのはその故です。この点、ご海容ください。なお、部会当日、司会をしてくださった亀崎澄夫広島修道大学経済科学部教授および部会世話人の関根順一九州産業大学経済学部教授には大変お世話になりました。記して謝意を表します。報告に際しては、3点の資料(①報告レジュメ、②拙著正誤表、③後藤康夫会員[福島大学特任教授]による拙著への書評[['経済』第279号、新日本出版社、2018年12月、116/117頁]コピー)を配布しました。

第Ⅲ冊において『エコノミスト』から行った抜粋を利用しているものであることを、それぞれ実証し、では彼らの積極的主張は何か等、種々の新知見を示した。

こうした検討に際しては、従来欠けていた運動史の視点を重視したが、正確であり、また有益であったのはレーニンの『なにをなすべきか?』、第一次ロシア革命時の「臨時革命政府」をめぐる論争、1922年の「政論家の覚え書」、「わが革命について」等でのマルクス/エンゲルス著作の読み方であった。拙著では、第2章での共産主義者同盟の「六月のよびかけ」の分析を初め、同盟史を熟考し、その綱領である『共産党宣言』第IV章における革命の戦略・戦術、その背景にある革命の展望としての「永続革命」の中味を正確に捉えようと試みた。

はじめに 自己紹介を兼ねて

報告者は専ら新『マルクス/エンゲルス全集』（新MEGA）諸巻の利用者として研究してきました。新MEGAは1975年頃から出始めました。この40数年ほどの間で『資本論』手稿以外の新MEGA諸巻を利用して一人で一書をまとめ上げた国内の研究者は寡聞ながら他に聞きません。

また、これは今回の報告表題にある拙著とは多少対象が異なりますが、『共産党宣言』の初版の原刊本や『ドイツ・イデオロギー』『フォイエルバッハ』章の手稿など、オリジナルを実検するというような作業を経て論文をまとめている方もあまり耳にしません。

『宣言』に関しては2016年に同じ八朔社から『共産党宣言』普及史序説』を出しました。初版23頁本や普及史で注目されるいくつかの刊本について立ち入って検討しています。

また、『ドイツ・イデオロギー』に関しては、もう大分前になりますが、1995年夏にアムステルダム社会史国際研究所（IISG）に赴き、『ドイツ・イデオロギー』『フォイエルバッハ』章の手稿を、フォトコピーではありましたが、逐一チェックいたしまして、論文を2本まとめました²。IISGに赴き同手稿のオリジナル手稿ないしはフォトコピーを参看した日本人研究者は結構たくさんいるようなのですが、論文をとりまとめている、それも複数とりまとめている研究者は、管見ながら報告者以外にはあまりいないように思います³。

² 橋本直樹「『ドイツ・イデオロギー』『I. フォイエルバッハ』の手稿の編成に関して」マルクス・エンゲルス研究者の会編『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第27号、八朔社、1996年6月、67～87頁；橋本直樹「『ドイツ・イデオロギー』における「疎外」についての一考察」鹿児島大学経済学会『経済学論集』第45号、1996年12月、41～61頁。

³ もちろん、「フォイエルバッハ」章の優れた邦訳学術版であります、マルクス/エンゲルス[渋谷正編訳]『草稿完全復元版 ドイツ・イデオロギー [序文・第1巻・第1章]』（新日本出版社、1998年）を出版され、度々説得力十分の廣松批判を著してきた渋谷正さんと、近年、「マルクス口述、エンゲルス筆記」説を即時異文の検討を行って見事に実証した大村泉さんのお二人がいらっしゃいますが、まあ別格でしょう。大村さんの「マルクス口述、エンゲルス筆記」説、ならびに渋谷さんの廣松批判の決定版は、いずれも大村泉編著『唯物史観と新MEGA版『ドイツ・イデオロギー』』（社会評論社、2018年）に収録されておりますので、それぞれご覧ください。なお、同書の拙書評「唯物史観と新MEGA版『ドイツ・イデオロギー』大村泉編著 [社会評論社、2018年]」経済理論学会編『季刊 経済理論』第56巻第3号（桜井書店、2019年10月発行予定）もご参照くださいますと幸甚です。

1. 新 MEGA の編集体制の問題について

新 MEGA の学術附属資料部（Apparat）等における編集者の解題などについては、『資本論1861-63年手稿』の「資本と利潤」, 「雑録」部分と「剰余価値学説史」部分の新 MEGA 編集者による執筆日付推定を、東北大学にいらっしやいました大村泉さんが初めて指摘・批判して、訂正させたこともありました⁴。

が、ここで申し上げたいのはまた別のことで、編集体制の問題——新 MEGA 第 I 部門と第 IV 部門との編集上の連携が欠けているという点です。この問題が拙著の第 6 章と第 7 章を書くきっかけになりました。

この点は、新 MEGA の今後の利用に際して、会員各位に留意して頂きたいので、詳しく申します。新 MEGA が、著書・論文等（第 I 部門）、『資本論』およびその準備労作〔手稿類〕（第 II 部門）、書簡（第 III 部門）、マルクス / エンゲルスのノート等の抜粋および蔵書への書き込み・傍線類（第 IV 部門）からなる 4 部門編成であったことはよく知られています。

当初、東欧諸国崩壊以前は、第 I / III 部門が旧東ベルリンの、そして第 II / IV 部門がモスクワの、各々マルクス・レーニン主義研究所が主担当でした。他に、いくつかの大学や研究所が編集を担当する場合もありましたが⁵。両研究所の編集上の連携は必ずしも十分ではなくて⁶、マルクスの抜粋類がその著作にどのように利用されているかといった情報の記載は Apparat に記載されることは稀でした。

報告者は、1850年のマルクスの抜粋がその発表された論説に利用された具体例を 2 点示してこの欠を一部補足しました。

「第 6 章では、新『メガ』第 IV 部門第 7 巻に初めて収録されたマルクスによるエヴァンズ著『商業恐慌』からの「抜粋」を検討した。その結果、①マルクスらが「評論。5-10月」の前半三分の一で1847年の恐慌史を描いた部分が、ほとんど本「抜粋」ならびにエヴァンズの著書を利用してのものであること、そこから、②マルクスらの積極的主張はこの部分の導入部にある過剰生産視点からの恐慌把握にあることを、③エヴァンズの著作自体の紹介とともに、明らか

⁴ 大村泉『新 MEGA と《資本論》の成立』（八朔社、1998年）116～119頁。

⁵ 現在の刊行状況等も含め、詳しくは、優れた新 MEGA 概説である、窪俊一「附篇 新 MEGA 全 4 部門 114 巻と既刊一覧」前掲、大村編著、282～297頁をご覧ください。

⁶ 例えば、「賃金、価格および利潤」は、現在、『資本論』関係手稿として第 II 部門第 4 巻第 1 分冊（1988年刊）に、また第 I 部門第 20 巻（1992年刊）に1864年 9 月～1867年 9 月の著作・論文・草案の一つとして、重複して収録されています。このような重複した収録は、きわめて異例であり、著述の二面的性格からの配慮ということもありはするのですが、両研究所の代表的なマルクス稿の取り合いがあり、お互いが譲らなかった結果という側面は拭えないように思えます。ちなみに、「賃金、価格および利潤」の最新の研究として、後掲の『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第 60 号・第 61 号合併号所収の大内初陽「『賃金、価格および利潤』の成立——原手稿に基づく章構成再考。英語版、独語版の先後関係の検討——」があります。オリジナル手稿のカラー写真も参照して、手稿の構成等を再考していますので、ご関心のむきは、ぜひご参照ください。

にした。」(まえがき, 7頁⁷)

「第7章では、新『メガ』第Ⅳ部門第7巻で初めて公にされた「ロンドン・ノート」第Ⅲ冊の「エコノミスト抜粋」を検討した。その中で、①マルクスらが「評論。5-10月」の中間三分の一で1848年革命後のヨーロッパの繁栄を論じた部分の多くがこの「抜粋」を利用してのものであること、それゆえ、②1850年10月12日～18日の作成であるとその日付を確定するとともに、③「評論」におけるマルクスらの積極的主張を「抜粋」利用箇所以外の箇所にあると特定し、それらを7点にわたって抽出した。」(まえがき, 7/8頁)

これは、新MEGAの編集体制のある意味では止むを得ない不備とも関連していたわけです。「評論。5-10月」所収巻、新MEGA, I /10の編集主幹であったマルティン・フント氏にかつてこの点を糺したことがあります。旧東欧諸国の激変のさなか、旧東ドイツのマルクス・レーニン主義研究所が労働運動史研究所に改組され、そのマルクス＝エンゲルス部門の部長として、新MEGA刊行継続の支援要請のため、1990年11月に来日された折にです。が、編集の生産性を高めるための分業体制のもつ短所であり、やむを得ない旨の回答がありました。

新MEGAは、東欧諸国崩壊後、編集が国際マルクス／エンゲルス財団(IMES)に移行し、編集が国際化され、いっそう学術化されましたものの、人員の不足はいかんともしがたく、こうした編集体制における各部門の連携、また各巻の連携の不備は改善されていないように見受けられまして、現在も変わりがないように思われます。例えば、著書と『資本論』手稿の両編集体制も緊密な連携をとることはまず不可能だったでしょう。一例を挙げますと、即時異文への着目が十分でありません⁸。その結果、ことに『ドイツ・イデオロギー』『フォイエルバッハ』章の執筆の実績が、「マルクス口述、エンゲルス筆記」であったことを文献的にも客観的な物証をもって立証できたはずであるにもかかわらず、そうなりません⁹。

2. 新MEGAを使った研究への移行と古典を読む意味(拙著を例に)

(1) 新MEGAの刊行状況

日本人研究者が待ち望んでいた資料は、現時点ですでにほとんどが出揃いました。

例えば、①『資本論』の手稿類、そしてマルクス／エンゲルス在世中の刊本はすべて公表されましたので、第Ⅱ部門は刊行終了ですし、②『経済学・哲学手稿』等パリ時代前後の手稿・ノート類

⁷ 表題の拙著からの引用頁表記は本文中の()内に示します。以下、同様です。

⁸ こうした分業体制の弊害は個人的にクリアするしかないようです。例えば、大村さんは、『資本論』手稿の編集経験をもっていらっしゃいますから、『ドイツ・イデオロギー』『フォイエルバッハ』章のオンライン版の編集にも携わることで即時異文への着目などが可能になり、丹念な編集をすることができたように報告者には思えます。

⁹ 「マルクス口述、エンゲルス筆記」が事実であることを、物的証拠によって示したのが大村さんです。詳しくは、大村泉「第5章 唯物史観の第1発見者」前掲、大村編著、76～120頁。また、『季刊 経済理論』第56巻第3号掲載予定の同書の拙書評を参照。

『1850年のマルクスによる経済学研究の再出発』（八朔社、2018年）を出版して

は刊行済みです。③『ドイツ・イデオロギー』を収める I / 5 も2017年11月末に出版され、同年末には鹿児島にも届きました。「フォイエエルバッハ」章については、オンライン版が本年8月下旬には公開される予定です¹⁰。

¹⁰ 同時に、公開を記念するシンポジウムも開催が予定されており、現在、詳細を計画中のようです。決定次第、経済理論学会のメーリングリスト等で案内があることと思います。

【補足】次のようなプログラム〔渡辺憲正さん作成〕が企画され、開催されました。

「『ドイツ・イデオロギー』と唯物史観—オンライン版公開国際シンポジウム—
—プログラム—

□開催日時

第Ⅰ部2019年8月23日（金）14:00～17:40

第Ⅱ部2019年8月24日（土）9:00～16:10

□開催場所

東北大学大学院情報科学研究科中講義室

□開会：8月23日14:00～14:30

主催者挨拶：大村泉（東北大学）

報告者自己紹介

□第Ⅰ部〔シンポジウム〕8月23日14:30～17:40

オンライン版のコンセプトと草稿読解

1) オンライン版のコンセプト：窪俊一（東北大学）

2) オンライン版の具体的構成と使用法：窪俊一（東北大学）

3) オンライン版とオーサーシップ問題：大村泉（東北大学）

休憩（16:00～16:10）

4) 渋谷版の刊行とオンライン版——「手稿を読む」ことなど：渋谷正（鹿児島大学）

5) M16-19の読解：大村泉（東北大学）

6) 質問討論

《司会》渡辺憲正（関東学院大学）

□第Ⅱ部〔ラウンドテーブル〕（前半8月24日9:00～11:30）

『ドイツ・イデオロギー』の成立／編集史上の諸問題

1) MEGA 版解題の検討——資料付き：玉岡敦（中国・陝西師範大学）

2) 『ドイツ・イデオロギー』編集史におけるオンライン版の位置：渋谷正（鹿児島大学）

3) 『ドイツ・イデオロギー』フォイエエルバッハ章に対する解釈と再建——新MEGA版 I / 5の発表によせて：侯才（中国・中央党校）

4) イデオロギー批判は、いつ、いかにして成立したのか：渡辺憲正（関東学院大学）

5) 質問討論

—昼食—

〔ラウンドテーブル〕（後半8月24日13:00～16:10）

6) 疎外論と物象化論——廣松説の検討：平子友長（一橋大学）

7) 中国における『ドイツ・イデオロギー』編訳史概観：盛福剛（中国・中央财经大学）

8) 『ドイツ・イデオロギー』の歴史認識——望月説の検討：平子友長（一橋大学）

休憩（14:30～14:40）

9) 『ドイツ・イデオロギー』研究とその現代的意義：

馮秀軍（中国・中央财经大学）

劉礼（中国・中央财经大学）

吳昕焯（中国・武漢大学）

10) 総括討論

◆特別企画◆

シンポジウム参加者のために以下の2つの見学ツアーを企画しております。

一方、現在まで未公開の主なものは、第I部門ですと、①1840年代の『イギリスにおける労働階級の状態』、『聖家族』、②『共産党宣言』およびその前後の著作物、③1848年革命中の『新ライン新聞』の諸論説；第III部門では、④『資本論』第1巻出版の時期以降のほとんどの書簡類、第IV部門では、⑤そうした書簡類と同時期の『資本論』手稿執筆に伴うノート類¹¹、⑥世界史年表や数学手稿等も含む、マルクス晩年のノート類、といったところです。

こうした現況に鑑み、日本学術会議の協力学術研究団体の1つであり、私もその事務局をお手伝いしております、「マルクス・エンゲルス研究者の会」が編集し、八朔社から発行しております雑誌『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』も紙の冊子体は、直近の第60号・第61号合併号¹²をもって休刊することになりました。この雑誌の当初の目的は、新MEGAに関係する情報をいち早く、関心をお持ちの会員へお届けするという点にありましたから¹³、それはすでに果たされて、役割を終えたということですね。

ツアー1：魯迅階段教室見学

8月23日（金）10:00～10:30 場所：東北大学片平キャンパス

ツアー2：東北大学所蔵マルクス関係貴重図書閲覧

8月23日（金）11:15～12:00 場所：東北大学附属図書館（川内）

主催

『ドイツ・イデオロギー』オンライン版編集グループ（代表：大村 泉）

協力

マルクス・エンゲルス研究者の会

連絡先

東北大学窪俊一研究室

¹¹ 第II部門と第IV部門の『資本論』と関係するノートとの関係については、竹永進「『資本論』の草稿研究の日本における最近の動向—新メガ第IV部門の編集作業との関連において—」大東文化大学『経済研究』第29巻、2016年3月、55～72頁。

¹² 内容は以下の通りです。(1)窪俊一「青年マルクスの肖像画」（3～9頁）、(2)大内初陽「『賃金、価格および利潤』の成立—原手稿に基づく章構成再考。英語版、独語版の先後関係の検討—」（11～37頁）、(3)大村泉「日本における『資本論』第1巻初版（1867）オリジナル刊本の蒐集と1920年代のマルクスブーム」（39～56頁）、(4)盛福剛「中国における『ドイツ・イデオロギー』編集史概観—廣松版翻訳（2005）と大村/渋谷/平子によるその批判以後を中心に—」（57～76頁）、(5)【『ドイツ・イデオロギー』所収新MEGA第I部門第5巻の解説主要部分の翻訳】1)新MEGA第I部門第5巻の「解題」、 「成立と伝承」関連テキスト略記—覧大村 泉/窪 俊一/渡辺憲正 訳（77～78頁）、2)解題〔新MEGA第I部門第5巻〕 玉岡 敦/大村 泉/窪 俊一/渡辺憲正 訳（79～149頁）、3)成立と伝承〔H⁵:フォイエルバッハ章のための草稿の東〕 大村 泉/窪 俊一/渡辺憲正 訳（151～175頁）、4)「フォイエルバッハ章のための草稿の東」とページ付け図解 大村 泉/窪 俊一/渡辺憲正 訳（176～178頁）。

目次をそのまま上記しました。後半の(5)とし、【『ドイツ・イデオロギー』所収新MEGA第I部門第5巻の解説主要部分の翻訳】と内容を明確にする見出しを補足し、さらにその細目を片括弧で数字を振って示した箇所は、新MEGA第I部門第5巻の「解題」および「成立と伝承」の翻訳です。そのため、今後、参照されることが多くなり、『ドイツ・イデオロギー』研究には必要不可欠の研究資料となりますから、各大学図書館には必備の号となることでしょう。

¹³ 拙稿「学会動向（第5回）マルクス・エンゲルス研究者の会」基礎経済科学研究所『経済科学通信』第60号、1989年7月、64～66頁および21頁；また、HASHIMOTO, Naoki: Bericht über die Arbeitsgemeinschaft der Marx-Engels-Forscher in Japan. *Beiträge zur Marx-Engels-Forschung: Neue Folge* 1991, Nr. 1: Studien zum Werk von Marx und Engels, 1991, S.210-218などご紹介していたところです。

おそらく、今後はこうした新 MEGA 等で公表されている新資料を基にした研究成果が我が国の研究者からは多く執筆されることになるのでしょうか、昨今はインターネットが盛んですから、そうした諸論文は、各大学図書館等で運営されているリポジトリのように、ウェブ上の何らかのプラットフォームに随時掲載されて公開されていくものと思われます。

公開の形式に関して、どんなものが最適なのか、また何か良いアイディア等がございましたら巨細を問わずご教示くださいますと幸甚です。

そういう意味では、マルクス/エンゲルスの古典が従来と比べましてアクセスし易く、そのため非常に読みやすくなります¹⁴。温故知新で古典を読んで、論文をたくさん書いていただきたいと思っています。私も微力は尽くしますが。

（2）運動史的視点

新 MEGA でマルクス/エンゲルスを読むというのもそうですが、レーニンの古典も等閑にすべきではないと考えます。この間、帝国主義を「死滅しつつある資本主義」と規定した彼の『帝国主義論』はあまり評判がよくないようで、視角もホブスンに依りかかり過ぎてその制約を受けているといった評価等も耳にしますが¹⁵。

本題に戻りまして、実は、拙著も、レーニンからずいぶん学んでおります。今日配布しております資料に後藤康夫会員が書いてくださいました拙著への書評があります。「あとがき」に注目されて、レーニンとの関連を指摘してくださっています。

「あとがき」だけではなくて、章題からでも第9章「レーニン『なにをなすべきか?』エピグラフ中の「党派闘争」の原義——「1852年6月24日付マルクス宛ラサールの手紙」の一章句——」がそうであることはすぐお分かりと思いますが、それだけでなく、第4章「ドイツ農民戦争」第VI章第2段落の意義とその背景——時機尚早の政権掌握についてのエンゲルス——」や第1章「マル

¹⁴ 一方、従来の研究書が新 MEGA において公表された資料的裏付けを得て、今後の新たな研究の指針としての役割をもつ場合も出てくるでしょう。そうした例として、ジャン・ブリュアの『フランス革命とマルクスの思想形成』が挙げられます。詳しくは、拙稿「著作紹介 ジャン・ブリュア著/渡辺恭彦訳『フランス革命とマルクスの思想形成』（八朔社、2019年6月15日発行）」福島大学経済経営学類同窓会『信陵』第96号、2019年10月発行予定をご参照ください。

¹⁵ 近年の『帝国主義論』の成立史研究において、次のような事情が明らかにされてきています。1915年の後半に、作家のゴリキーが社主であったペトログラートの「パルス [帆]」出版社で、『戦前および戦時におけるヨーロッパ』と題する小冊子シリーズが企画され、ヨーロッパ各国について、イタリアはルナチャルスキー、オーストリア＝ハンガリーはジノヴィエフ、フランスはポクロフスキーとロゾフスキー、イギリスはヘラスコフ、ドイツはラーリンが執筆し、これらの小冊子シリーズの総論として「現代の生活における金融資本の役割、経済的様相における帝国主義にかんする序論的な性格をもった」一冊をレーニンが担当することになっていたのです。この企画が頓挫し、後に、予定されていたレーニン執筆のこの序論が単独で『帝国主義論』になった、という事情です（エム・エヌ・ポクロフスキー [大沼作人訳]『『帝国主義 [論]』はいかにして生まれたか』『経済』第20号、新日本出版社、1997年5月、112～114頁）。『帝国主義論』を見る際には、この事情を汲む必要があります。その背景など、詳しくは、服部文男『『帝国主義論』前後』『マルクス探索』（新日本出版社、1999年；初出は『経済』第20号、1997年5月）188～193頁および『『帝国主義論』前後・補遺』（同前；初出は『経済』第23号、1997年8月）207～209頁をご覧ください。

クス／エンゲルスの諸活動（1849/50年）」も、実はレーニンを読むことなくしては、書けませんでした。あるいは、それぞれ脚注にレーニンの文献が参照指示してありますから、そこからお分かりになるかもしれません¹⁶。

確かに『レーニン全集』は、変な言い方かもしれませんが一般の人から見れば屁理屈の堆積としか見えないものなのでしょうが、彼のマルクス等、古典の読み方は、少なくとも私には大変参考になります。今は大変評判の悪い『国家と革命』ですが、これも私は実によく書いているのではないかと思います¹⁷。

これらは皆、レーニンというよりも、運動史との連繫と言った方が一般化できるように考えます。そういう風に拓げますと、直接レーニンには関係がない拙著の第2章や第5章も当時の共産主義者同盟の運動を取り上げていますから、運動史の視点から書かれています。古典の内在的読み方にはやはりマルクスらのものであれば、運動史の視点が必須でしょう。

3. 拙著の問題意識：当時のマルクス／エンゲルスの革命の展望

拙著の狭い意味での問題意識は、表題通りです。1850年にはマルクスのロンドン亡命が確定し、そこでの資本の運動の実態を観察し、大英博物館の歴大な蔵書を利用して、経済学の研究を再出発させるわけです。この出発点での彼の経済学の中味は、従来十分な検討がなかったので、これを確定してみるところにありました。

しかし、そのためにも、今申し上げました1848～50年当時の共産主義者同盟の運動に視野を拓げる必要があるのではないか、という拙著のもう一つ広い問題意識がありました。我が国の従来の研究論調は拙著16頁脚注6にあるような文献です。これらはどうもみな違うのではないかと感じていました。いわゆるエンゲルスの遺書（マルクス『フランスにおける階級闘争』1895年版「序文」）のこれまでの読み方にも違和感がありました。どうも、1848～50年当時のマルクス／エンゲルスの革命についての、その都度の展望をどう捉えるかが要点で、これを従来説は捉え損ねていたように思うのです。

拙著第1章冒頭にありますが、『共産党宣言』以来の彼らの革命の見通しおよびそれに合わせた運動と戦術についての私見は、極々約めると次のようです。

《英仏の市民革命に照らすと、仏独資本家の民主主義革命勝利後も、社会の最下層の大多数者（労働者階級）の利益を目指す長い革命が続く。初めは同盟員等自覚した少数者の指導だが、革命が多数者革命の条件を最もよく備え、世界市場を支配するイギリスを捉え欧州全域へ拡大

¹⁶ 第1章37頁脚注8、第4章73頁脚注1、86頁脚注20、脚注21。

¹⁷ 周知の通り、1917年十月革命直前にフィンランドに身を隠していた時期に、いわゆる「青いノート」に執筆し、革命後に発表しています。亡命しての地下活動下の執筆でしたから、資料的には非常に不備で、例えば、マルクスの『フランスにおける階級闘争』は手に入れておらず未読の状態だったように思います。こういった執筆状況を勘案した研究が必要でしょう。ちなみに、拙著第10章からは、レーニンがマルクス／エンゲルスのみならず、ラサールのものまでいち早く読んでいたことが分かります。

すると、労働者階級が革命の意義を理解し立ち上がり、特にイギリスのそれが運動の先頭に立ち、彼らの政権掌握が長い革命の第一過程の成果かつ第二過程の出発点となり、最後は労働者階級の究極の勝利で終わる》。(拙著第1章冒頭～を圧縮)

報告者は、これがいわゆる「永続革命」の具体的な中身だと考えるのですが、そのような理解はあまり一般的ではないようで、不思議に思っています。

このような革命の見通しのもとに、ご承知の『共産党宣言』第IV章における大要以下のような革命の運動方針と戦術が提出されているわけです。もちろん『宣言』は共産主義者同盟の綱領でしたから、同盟はこの路線に沿って活動しているわけなのです。

《運動と戦術は欧米各国の状況に応じた種々の形態を求めた。資本家階級に対する労働者階級の闘争は国際的だが、政治闘争は一国的だからである。資本家階級が既に優勢な国では、労働者階級はそれに対してのみ闘う。資本家階級がまだ政権にない国、例えば「ドイツでは共産主義者の党は、資本家階級が革命的に立ち現れるや否や、資本家階級と共同し、絶対君主制、封建的土地所有及び小市民層に対し戦う」。が、常に労働者に資本家階級と労働者階級の敵対的対立の明瞭な意識を形成、民主主義運動の最左派の立場を貫く》。(同前)

では、マルクス/エンゲルスの一貫性だけ見て、彼らに誤りといったものはなかったのかと問われますと、それは、私は、彼らがお手本にしていたのが英仏の市民革命だったという点にあると考えています。この点を詰めていくのが今後の課題となるわけです。が、私見はまだ十分論証できない段階なのですが、それにもかかわらず、現在の問題意識だけでもご披露すると、彼らの展望のうち、特に、将来の革命の過程で権力を掌握する階級の順序というのが要点になるのだと思います。この点が、研究史では重視されていなかったのではないのでしょうか。従来、特に英仏の市民革命の順序で、今後のドイツ等々の国々の革命の政権掌握階級が推移するはずなどない、と考えるのが私には自然というか、普通のように思えます。マルクス/エンゲルスや労働者階級だけが歴史から学ぶのではなくて、他の諸階級も体制側もそれは同様なわけですから。この点を一般化すると、遅れて近代化する諸国の問題ということになってくるのでしょうか。特に日本の近代化、昨年150年を迎えた明治維新をどう見るか等々にも関係する問題になるのでしょうか¹⁸。

¹⁸ 日本の場合も、資本制生産様式への移行に際しては市民革命とセットになる産業革命のみならず、ドイツと同様に、「最終消費財生産の資本主義化」の問題が検討されなければならないでしょう。この点で、柳澤治『資本主義史の連続と断絶——西欧の発展とドイツ——』（日本経済評論社、2006年）においてこの問題が提起されたことは大変重要です。社会の実在的土台の、このような経済史的再検討と同時に、経済思想史の問題としても、1870年代にヨーロッパにおいて軒並み、投下労働価値論に替わり、効用価値論に基づく、いわゆる近代経済学の祖形である新古典派経済学が社会的意識諸形態として、またイデオロギー的諸形態として、成立してくるのは、「最終消費財生産の資本主義化」なくしてはあり得なかったでしょう。

おわりに

全体が大変雑駁な内容の報告となってしまう、大変恐縮です。拙著について、疑問の点等、なんなりとご質問くださいますと幸甚です。ご清聴、どうもありがとうございます。

【附録】

橋本直樹『1850年のマルクスによる経済学研究の再出発』（八朔社、2018年）

正誤表（2019年6月12日現在）

矢印（→）の前が誤りで、矢印の後が正（誤→正）。一部、下線を付し、訂正後の姿を示した。

まえがき

- 1) 8ページ3行目 ダニエスル → ダニエルス

第1章

- 2) 17ページ1行目 ものなである。 → ものなのである。

第2章

- 3) 29ページ本文1行目 第IV部 → 第IV部門
4) 34ページ7～8行 ()内の文字列のポイントを周囲と同様1つ大きくする
5) 44ページ5行目 推定, は → 推定は,
6) 48ページ本文最下行 第IV部 → 第IV部門

第3章

- 7) 60ページ脚注(40)の4/5行目 Bund der Kommunisten 1836–1852
→ *Bund der Kommunisten 1836–1852* [書名なのでイタリックにする]

第4章

- 8) 74ページ本文下から6行目 IIIに続く文字列のポイントを周囲と同様1つ小さくする
9) 99ページ3行目 拘束れ」る → 拘束され」る
10) 第4章の奇数ページの柱 [副章題を主章題に取替]

第5章

- 11) 104ページ脚注(3)の5行目 97ページ → 97～149ページ
12) 118ページ脚注(25)の2行目 講義の最初の部分 → 講義の最初の部分 [下線を引く]

第6章

- 13) 136ページ右欄5行目 本章138ページ → 本章133ページ
14) 142ページ左欄本文9行目 / → / [全角スラッシュにする]
15) 147ページ右欄1行目 エヴァンズ抜粋 → エヴァンズ『商業恐慌』

【補論】

16) 159ページ3行目 changcd → changed

17) 160ページ13行目 182555年 → 1855年

18) 161ページ4行目 エンゲルス → エンゲルス

第7章

19) 172ページ本文9行目 本章160ページ → 本章168ページ

20) 173ページ6行目 本章163ページ → 本章169ページ

21) 173ページ本文下から4行目 次頁上の表 → [削除する]

第8章

22) 194ページ脚注(15)の1行目 イエニー → イェニー

あとがき

23) 219ページ脚注(3)の7行目 [昭和62 → 昭和62

24) 219ページ脚注(3)の8行目 紘一)の → 紘一)]の

著者略歴

25) [223] ページ 主要著作欄 下から2行目 「《パリ草稿》における「私的所有」批判」→ 「「経済学批判」の端緒的形成——《パリ草稿》における「私的所有」批判——」[主主題の脱落を，また副主題前後にダッシュを，補う]